

長編冒険小説 書下ろし

人喰い海流

小嵐九八郎





NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。

両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット—NPN243

人喰い海流

長編冒険小説

平成3年12月20日 初版第1刷発行

著者 小 嵐 九 八 郎

発行者 伊 賀 弘 三 良

発行所 しょう 伝 社

東京都千代田区神田神保町3-6-5

九段尚学ビル 〒101

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷所 堀 内 印 刷

製本所 ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。

Printed in Japan

ISBN4-396-32243-7 C0193

©1991, Kuhachirō Koarashi

書下ろし
長編冒険小説

人喰い海流

小嵐九八郎

目 次

序章 南の果ての島へ

1章 不吉な予言

2章 鯨の棲む島

3章 孤島

4章 隠された血

終章 海の波濤

解説 新保博久

317

295

245

171

85

21

7

序章 南の果ての島へ

一九九一年六月十一日。

わたしの「生」のテーマは、神はいないということだ。いるとしたら、わたしは、憎む。

定員二十五人の船が、進む。

海は、藍染めの原液をそのまま溶かしたような色だ。

船は、日本列島の南の果てに近く、かつ最も西に位置している島を目指している。
北回帰線は、近い。

いくつもある無人島をすり抜け、船は行く。

琉球諸島の外れの波濤島へ。

三年前の波濤島の人口は、三百二十四人。現在では三百人を切っているに違いない。高校がないので、中学生以上の若者は島を離れて進学する。産業は、砂糖キビの栽培と加工、それに焼酎作りぐらいしかない。島の周辺は、巨大なローニンアジ、イソマグロ、クエ、カツオなどの宝庫

であるが、消費地まで運ぶ油代が嵩み、漁業に従事する人は十人もいない。

波濤島の周囲は一二・五キロメートル。歩けば三時間半ほどか。

濃い藍色の海原の水平線に、五月の若葉を思わせる緑が混じり、淡いブルーも混じる。波濤島が、近いのだ。

のどかと言おうか、切ないと表現しようか、それとも怨みが晴れないとでも文句をつけようか、藍とうす緑とブルーの三色の海の上に、ぽっかりと波濤島が浮かんでいる。

心なしか、海の匂いの中から、緑のしたたるような匂いも飛んでくる。波濤島に生い繁る亜熱帯の樹木の匂いだ。葉の厚いフクギ、閨のような緑の葉のハマシタン、この地方では珍しく秋に葉の落ちるアカギ……。

しかし、緑したたる島に、今年は赤茶けて褐色の土肌が斑に目立つ。

ああ、そうか。空梅雨だったと聞くから、砂糖キビが枯れはじめ、畑の土も乾き切っているのか。

それに加えて、表土を引っくり返し、散らばっている畑を一カ所に集め、スプリンクラーを備えつける土地改良工事がますます進行しているのだろう。雨が降るとこの土は、海へ容赦なく流れ出し、海が赤くなる。海が赤くなると、波濤島の海岸線の五分の二を包む珊瑚が死んでいく。珊瑚こそ、この地球上で一番、その周りに生命の種類を集めている。アマゾンの森以上なのだ。

そもそも土地改良工事の効果は最初の四、五年の間だけで、そのうちなぜか農薬との追い駆けっこになり、あんなに荒れ土に強かった砂糖キビは病虫害に弱くなり、この先はどうなるのだろ

うか。島の人々は、牧畜業に手を出そうとしているけれども。

でも、そんなことはどうでもいい。

わたしは、大切なことを成し遂げたら、この島から消えていくのだから――。

わたしは二十一歳の女。

大学三年だ。理由があつて、魚類を研究している。水族館でもバイトをした。今年の三月、香港の海水浴場で、人間が鮫に胸部以外を食われ殺されてから、わたしは落ち着きを失った。犯人は、あの海域の鮫の種類と写真で見た歯型から、メジロ鮫に違いない。メジロ鮫は青みがかった青灰色をしている。目には瞬膜という、光を調節し瞳を保護する一重の瞼がついていて、小鳥のメジロのような表情をしている。性格は、癡猛。英名ではこの仲間を Requiem shark と呼ぶ。つまり、「葬送曲の鮫」である。

そして。

五月に、台湾の蘇澳で網を引きちぎって暴れたが、十人がかりで撲殺された六メートルのメジロ鮫の腹の中から、人間の運動靴が二足、幸いにか、わたしを急かすように発見された。

そう、ボロボロになって出てきた運動靴は、ヴェトナムの漂流船から溢れた人々のものと推測された。もちろん、人間の肉はすでに消化され溶解したと、地元の新聞記事は断定していた。

ちなみに波濤島から台湾までは二〇〇キロだ。波濤島から東京までは二〇〇〇キロあるから、台湾のほうがはるかに近いことになる。

いずれにしても、香港↓台湾↓日本の南端と、人食い鮫が北上してくるムードは整った。

わたしは知っている。メジロ鮫——人食い鮫の隠された性格を。メジロ鮫を呼び寄せる方法を。凶暴化させる手段を。

それは二つある。

一つは——。

二つは——。

いまは語るまい。二つの手段を。

そして語るまい。背負いきれないわたし自身の不幸を。

波濤島の横っ腹の一部が、見えてきた。海からの高さが三五メートルある断崖が続いている。誰が名づけたか、殺那崎ころなきという。たぶん、かつての薩摩藩さつまによる琉球支配時代に、人頭税にんとうぜいの過酷さに耐え切れず、自ら死を選んで海へ飛び込んだ言い伝えの名残りだろうと、わたしは推理する。

殺那崎が、夏至カーチバイ南風の向かい風に抗あらがい、白くささくれだっている。

殺那崎の上は、草が生えて平らだが、ところどころにモンパの木が繁さかっている。特に「一本モンパの木」は遠くから見えるほど逞たくましく、崖おのつ淵おのに一本、雄々おおしく聳そびえている。モンパの木は、昔、素潜すもぐりに使う水中眼鏡の枠わくに使った。斧おのを一度入れても、すぐには斧が引き抜けないほどに、木質は頑丈だ。

殺那崎の真下は、いきなり水深が三〇メートルもあり、絶好の釣り場となっている。鮫も現われる。

が。

さらに絶好の釣り場は、殺那崎から一二〇メートル離れて、標高三〇メートルある鮫島の南の斜面の真下あたりだという。水深が五〇メートルはあり、潮が左右からぶつかる地点だ——釣りは狭く、釣り場に渡るには、大きな船だと小回りが利かず駄目だ。小さな三・五メートルほどの小船がいらしい。

その鮫島が見えてきた。

鮫島の名は、その形がくわっと開いた鮫の口の中の形に似ているから、つけられたのだろうか。鮫にもいろいろあるが、人喰い鮫の口の中には、尖った三角形の歯と波形の鋸の刃の形をした歯が同居していて、その歯は欠けても欠けても、次から次へと押し出され、再生してくる。この鮫島も、ギザギザの岩で斜面は覆われている。

というより、やはり実際に、人喰い鮫が出現するからこそ鮫島と名づけられたのだろうか——あの子は無知だから、「二〇メートルのジンベエ鮫も人を襲わない。人喰い鮫のアオ鮫もメジロ鮫も、素潜りした時に見かけるけど、昼寝をしてるみたいで呑気だよ。おれと同じ」と言うけれど、とんでもない……。

わたしは、見た。

三年前の五月に。

殺那崎と鮫島の一二〇メートルの狭い海峡で、青みがかった灰褐色の鮫を、もう一匹の鮫が軀からだにガブリと噛みつき抑え込み、凶暴な交尾を迫る姿を、海面のスレスレで。それは人間の男がする性の形に酷似していた。そう——それは、わたしにおぞましい瞬間を思い出させた。

——でも、いまは黙していよう。

鮫島のとっぺんに、やはりモンパの木が一本、生えている。南の斜面の海面スレスレには、人が二、三人だけ入れる岩場がある。満潮の時には、海面までは二メートルもなく、小船で接岸するとしても、泳ぎに自信がなければ、この絶好の釣り場に入り込めないだろう。

わたしは、殺那崎と鮫島を、しっかり目に刻む。

目に刻むだけでは安心できず、ノートを広げ、スケッチする。

殺那崎の東には、目に滲みるクリーム色の砂浜が見える。浜木綿ビーチだ。

わたしは、三年前の地図と最新の観光地図を見較べる。

そして、最新の地図を頭に叩き込む。もっとも、変わったといえば、民宿が三軒だったのが四軒になったことぐらいだが。

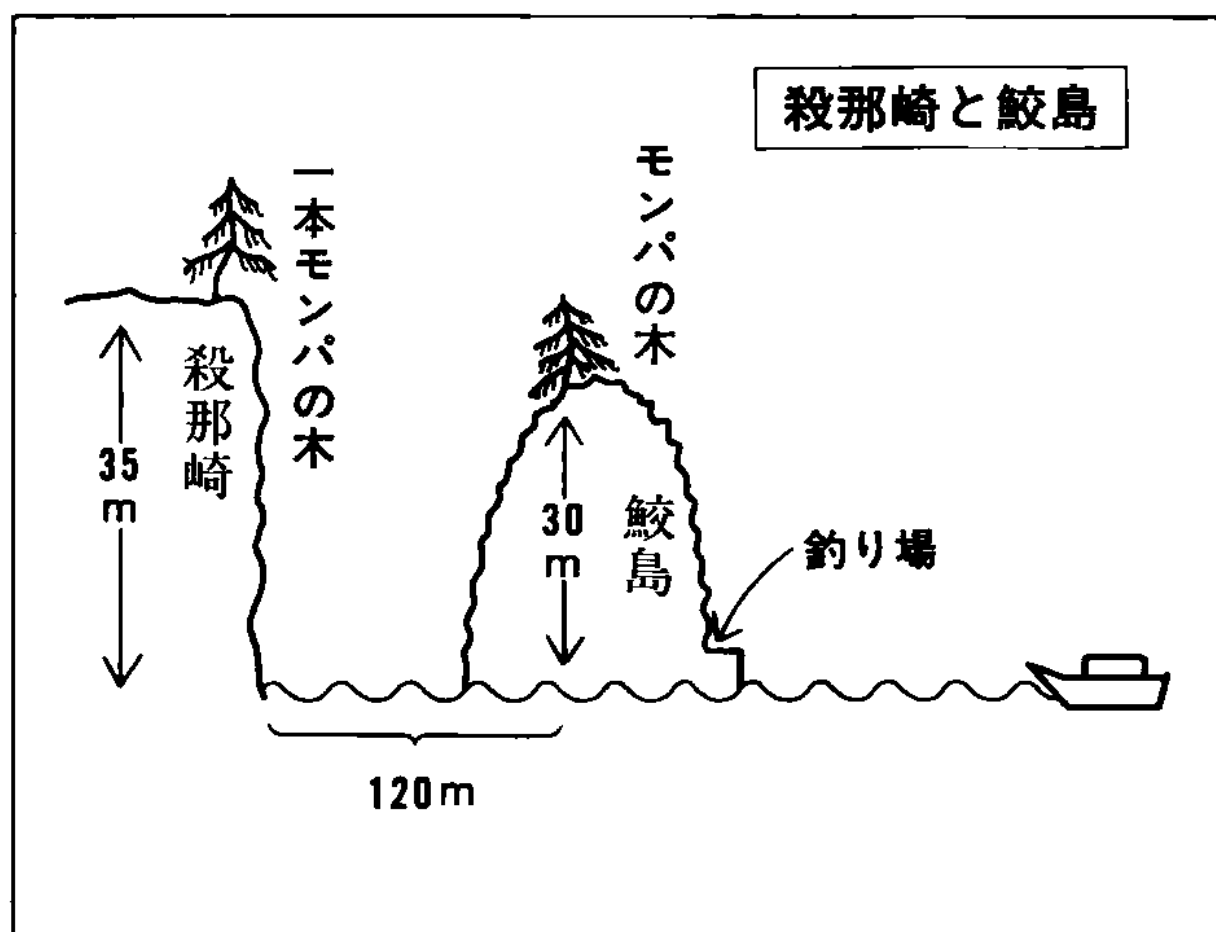
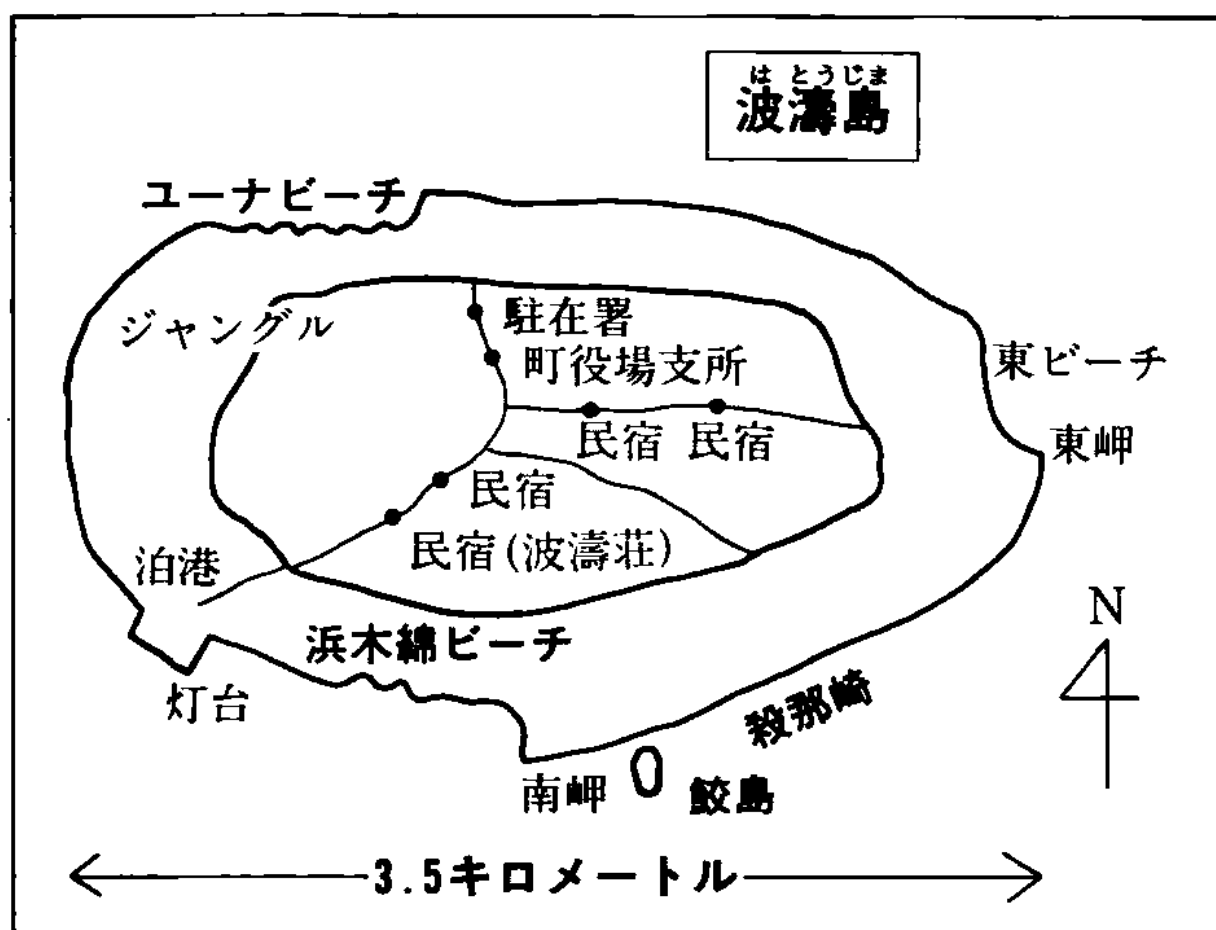
港が、見えてきた。

わたしは、オペラグラスを覗く。

いる、いる。

あの子が——。

幸せいっぱい、なんの苦しみも知らないあの子が。



うわア、でも、大きくなった。ワゴン車の前に立っていて、ワゴン車より少し低いぐらいだから、一七五センチはあるのかしら。そうか、あれから三年、もう中学三年だね。顔つきも、大人寸前のいかつさを帯びてきた。気をつけなくっちゃ、あの子は本当のことを知らないんだから……。でも、あの子は三年寝太郎って昔話の男みたいのに、のんびり、でれーんだから、余計な気を回す必要はないのかな。余計な気を回すと、かえってわたしの判断力が鈍る。

それにしても、遠くを見つめるあの子の瞳は、このオペラグラスさえ突き刺しそう。やっぱり、成長したのかしら。それとも、わたしの目がおかしくなったのかな。あの三年寝太郎の子の性格が変わるなんて……。

あつ。

あの男も、ワゴン車から丸太ん棒のような片腕を出している。

最愛の妻と子に囲まれ、民宿経営のかたわら、釣り三昧で暮らす男。最愛の人間の過去を知らない男。いや、知ろうともしない男。

あの男が、欠伸をした。

背こそ低いが、頑丈な軀つきをしている。喧嘩をしたら、本土の男なら二人いっぺんにやっつけかねない男だ。注意してかからねば……。

でも、――

肝腎要のあの女は、迎えに来ていない。

迎えに来ていないのは、わたしにとって正解だ。やはり、わたしに気づいていないのだろう。

ということは、わたしが舐めた苦しみも知らないということだ——。いいのだ。いまに。

しかし。

淋しい。

あの女には、迎えに来てほしかったという思いが、わたしの中に、ちょっぴりある。

ふん。

グレーの制服を着て、お巡りさんが腕時計を見ている。三年前と同じお巡りさんだ。異動などというのはこの離島にはないのか。わたしに色気たっぷりで、夜の浜辺への散歩を再三再四にわたって誘ったお巡りさんだ。日に二回の定期便が港に入る時だけ制服で、あとはトレーナーの上に着替えてしまってお巡りさんだ。まだ独身に違いない、わたしが来るというので鼻の頭を掻き掻きそわそわしている。でも、この島にはたった一人の警察官だ。大切に扱わないと……。

定期便が、沖で停まった。

小さな舢舨はしけが、遅れて迎えに来た。のんびりしている舢舨の船長だ。

わたしはたった一人、舢舨に乗り移る。

「にへーでーびる」

「にへーでーびる」

島の言葉で、ありがとう、を定期便の船長と舢舨の船長が交わし、郵便物の交換や荷物の交換をする。

そのほかにいろいろのんびり無駄話を交わし、やっと舢舨が動きだす。そう、この島の凄いと